

「負えない重荷」と向き合う

二村太郎

奨励者紹介[ふたむら・たろう]

同志社大学グローバル地域文化学部准教授

[研究テーマ] 農と食の地理学、北アメリカ地域研究

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていただきます。

(コリントの信徒への手紙一 10章 13節)

はじめに

みなさん、こんにちは。ただいま紹介いただきました、グローバル地域文化学部のアメリカコース所属で主に地理学関係の科目を担当している二村太郎と申します。実は5年ほど前にこの奨励の依頼を受けたことがあったのですが、その時ちょうどアーモスト大学への長期派遣が決まっていた、日程的にあわないということで「ぜひまたの機会を」とお伝えしていましたが、今回、このような機会をいただきまして、喜んで話をさせていただくことになった次第です。

さて、今日は奨励題を「『負えない重荷』と向き合う」としました。私は名前が太郎とありますように、簡単に想像がつくと思いますが、長男です。さらに、4人兄弟の長男で、私の下に3人の弟がいます。男4人兄弟で育ちました。確率的に父と母の2分の1の4乗で16分の1ですが、そういう家族で育ちました。そのような私たちを産んだ母が、実は非常に活動的で敬虔なクリスチャンで、私と弟たちは小さい頃から教会学校に行き、賛美歌を歌い、クリスマス礼拝に参加し、聖書や主の祈りや賛美歌にも馴染みのある幼少時代を過ごしてきました。キリスト教ということあまり考えずに、日曜日には教会に行くものだと思いつつながら過ごしていました。

私が小学校6年生になった頃、父が仕事でアメリカに支社をつくることになりました。父は中小の半導体系の商社に勤めていましたが、海外に行くことになり、私を含めて4人兄弟、そして父と母と一家6人でアメリカの西海岸のサンフランシスコの郊外に住むことになりました。当時は、みなさんの頃と違い、英語を小学校で学ぶことはなかったので、ローマ字しかわからない状態で行きました。現地ではいろいろ苦労がありましたが、同時にそこで生活したことが、結果的に今の私の一部に結びついているなと思っています。

アメリカ生活は山あり、谷ありでしたが、もともとギャンブル好きだった父がアメリカのカジノにのめりこんで、だんだん借金をつくっていくようになりました。借金とりが日本からアメリカへ毎日のように電話をかけてきて、どうしようもないということで、最終的に私の親は離婚に至ったのですが、その頃、私は長男だったので母の話をよく聞く立場にいました。その折に、家の苦難に直面していた母が繰り返し話していた言葉が、今回の聖書で挙げた「神さまは負えない重荷を負わせない」という言葉でした。私たち4人を

育てながら、毎日大変なことが起きながらも、ずっとその言葉を繰り返していろいろな困難や苦勞に向き合い、時には失敗をしながらも、この言葉が毎日来る次の日に向けて奮い立たせていたのではないかなと思います。

人生で直面する「重荷」

私が今お話ししたことは、これまで歩んできた道の最初の頃のことですが、今日、来てくださったみなさん、1年生だったら18年、4年生だったら22年、もっと大人の方だったら50年、いろいろな人生を歩んできたと思います。そして、振り返ると、そこにはさまざまな困難があったことと思います。それはたとえば学校の試験勉強やレポートの課題であったり、論文の執筆であったり、部活での試合、パフォーマンスであったり、演奏であったり、中学や高校、大学での入試の成功や失敗であったり、バイト先で仕事を覚えることの難しさであったり、そこでの人間関係であったり、さらには家族との関係であったり、好きになった人と意見が合わなかったり、パートナーとの意見の食い違いや関心の違いであったり、さまざまな困難なことを経験したことがあると思います。みなさんは、それらに対してどのように対応してきましたでしょうか。

もちろん徹夜をして課題に向き合った人もいますし、直前までがんばってうまく発表したという人もいれば、うまくいかないまま終わったということも、人生の中でたくさんあったと思います。今日、お話しするタイトルを「負えない重荷」と名付けましたが、みなさんの人生は、「負えない重荷」を負い続けることがすべてではありません。重荷を降ろして、そこから離れることも一つの大事なことです。

新約聖書では「神さまは、耐えられないような試練にあわせることはなさらず、ともにそれに耐えられる、逃れる道も備えてくださっています」といっています。みなさんにお伝えしたいのは、何よりも困難に直面した時に、それが自分だけの問題と考えるのではなく、それに向き合い続けることも、あるいは逃げていくこともできる。「負えない重荷」をすべて引き受けることはない、それを自分と向き合いながらとらえてほしいということです。

もちろん、グローバル地域文化学部や他学部で学んでいて、期末レポートを提出しないと単位はとれませんし、勉強をせずにTOEICやIELTSでいい点数はとれません。しかし、もしかすると次に受け直すことで、もっとよい成績やスコアがとれるかもしれません。体調不良の中で無理を重ねながら大学に行ったり、アルバイトを続けたりするよりも、思いきってスッと一週間完全に休んでしまったり、あるいはふらっと鴨川にだってデルタで川の流れを見たり、もうちょっと時間が必要だと考えたら思い切って半年休学して新たな空気を吸ってみるの方が、意外に自分の新しい道を見つけることができるかもしれません。単に重荷から解放されるだけでなく、重荷との新たな向き合い方、あるいは重荷が重荷でなくなってくることもあるかもしれません。

重荷から離れてみる

実は先週末、グローバル地域文化学部で10周年記念行事がありました。講演会や演奏会があり、多くの卒業生が来てくださったのですが、その日、私は日中の仕事を終えてから食事会に参加して、卒業生に挨拶をしながら「私のことを知っていますか?」と声をかけていくと、「ああ、〇〇さん」とちゃんと名前がわかる場合もありました。

その中に「1年生の時、先生の英語のクラスをとりました」と言う卒業生がいました。「わかります。先生のことをよく覚えています」「覚えているの?」と言うと、別に英語の授業ではなくて、その卒業生は当時アルバイトをしていて、ブラックバイトで苦しんでいたそうなのですが、ある時に私が英語の授業と関係ない形で「労働者というのは、みなさん選択する権利があるから、仕事を求めて応募するのも自由、辞めるのも自由。だから決して、そのバイトをずっと続ける必要はないし、辛かったら辞めたらいいですよ」と話をしたそうです。そういった話をした記憶はたしかにありました。

4年生で就職活動をされている方、これからアルバイトを探していく方、いろいろいると思います。労働者はしっかり権利を守られています。働くことはもちろん、どういう仕事を選ぶかも自由だし、応募するのも自由、そして辞めるのも自由です。その卒業生は「何となく重荷から解放された。この言葉で救われた」と言ってくれまして、「ああ、そうだったんだ」と気がついたのです。同時に、その卒業生の言葉から、「グローバル地域文化学部の講義で伝えたことではなく、意外なところから、みなさんに教えることもできるんだな」と思いました。今回の奨励も、その一つの機会ではないかなと思います。

もしよろしければ、みなさんも胸に手を当ててみてください。どんな重荷を抱えているか、重荷でないものかもしれないけど、ちょっと気になっていることがあるかもしれません。それは人との関係であったり、終わらせなければならない課題であったり、あるいは体の不調であったり、それは人それぞれだと思います。誰も人生、そんなに順風満帆ではないので、いろんなことが発生します。それにすべて向き合おうとするのも大事かもしれないけど、もしかしたら一歩引いてみる、一歩、外に出てみる、あるいは違った道を歩んでみる、そうすることによって耐えながら向き合い続けるよりも、逆に耐えるのではなく、逃れていく道が新しい機会をつくるかもしれません。

聖書の言葉と支え

私は今回、この場で奨励の機会をいただきましたが、何を話そうかと考えていた時にふと思い出したのが、クリスチャンでない私にとっても「聖書の言葉は、ずっと私の中で支えになっていたな」と思われる母の姿でした。母は私が同志社大学に就職した時、ものすごく喜びました。クリスチャンの大学で「ぜひがんばってほしい」ということで。私はまだクリスチャンにはなっていませんが、ちょっとでも親孝行したかなと思います。キリスト教で語られる言葉が、みなさんの少しでも支えになっていたり、あるいは今後支えることになることがあるかもしれません。重荷にどう向き合っていくか、これどうしようかという時、ふと、この聖書の言葉を思い出してもらえると、もしかしたら、みなさんはスッと心が楽になり、新たな道が生まれてくるかもしれません。

もっと言いますと、ここに集まっているみなさんの中には、第一志望で同志社大学に入った人もいれば、第一志望ではなく、本当は別の大学に行きたかったが、いろいろな流れで同志社に来たという人もいるかもしれません。でも、それも縁だと思うのです。私も実は第二希望の大学に入って進学し、その後いろいろなことがあって今に至っています。その時はその時で、辛い時もありますけど、一歩引いてみると、ちょっと人生を歩んでみると、「あ、これでよかった」ということもたくさんあります。場合によっては、この道から離れてみたり、一生懸命向き合ってみたり、それぞれですけど、今回、同志社大学に縁があって来てくださった学部生や大学院生のみなさん、教職員のみなさん、ここでみなさんが集まっていることも何らかの

きっかけだと思います。

また苦しい時があったら、この聖書の言葉を思い出してください。重荷に対してどう向き合うか、必ずしも向き合い続けることではなく、そこから一歩離れることも、そして時間をおいてみることも、一つのきっかけになるかもしれません。縁あってキリスト教主義の同志社大学で過ごすようになったみなさんの大学生活を、ぜひ応援していきたいです。それが実りあるものになることを願っています。みなさん、それぞれ自分たちの思いで「重荷」に向き合い、逃れ、そしていい人生を歩んでください。

2023年11月8日 今出川水曜チャペル・アワー「烏丸ウィーク奨励」記録